東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
共同研究プロジェクト「語彙と文法」（主査：梶　茂樹）平成 21 年度第 1 回研究会
日時：2009 年 7 月 18 日（土）　13 時 30 分～17 時 00 分
場所：AA 研マルチメディア会議室（304 室）
発表者/発表題目：
　藪　司郎（AA 研共同研究員，大阪大学名誉教授）
　「アツィ語とビルマ語－語彙と文法を考える」

【報告要旨　6 頁】
◆当日発表時に用いた配布資料（本文１７頁＋言語名対照表＋関連地図＋拙著『アツィ語語彙集』）を添付する。語彙集は除く。
０．言語調査
《言語調査は語彙調査から始まる。》
　言語事実のよく知られていない言語を研究対象とするときには、その言語の言語データを集めることから始めなければならない。言語調査の第一段階では、基礎語彙項目よりなる言語調査表（言語調査票）を用いて、1000 から 3000 項目ほどの語を収録し分析する。
　①まず当該言語の音韻（音素）体系の把握と音韻（音素）目録の作成に努める。語を 300 から 500 項目ほど集めた段階で、音韻体系のあらましを摑みおおよその音韻目録を作ることができるであろう。
　②当該言語の基礎語彙の集積の過程で、語の意味記述と語彙体系の把握に努める。たとえば、親族語彙・色彩語彙・数詞など極めて高い体系性を示す語彙については、当該語彙における語と語の形式上・意味上の相互関係がどうなっているかを十分見極める必要がある。
　③拘束形式（附属語）を中心に、当該言語の文法関係を規定する文法語彙は、用例とともに収録することになる。直示表現の人称詞や指示詞は、自由形式（自立語）・拘束形式の如何にかかわらず、それ自体体系性をもち文法関係を担う語彙として、記述されねばならない。
　④当該言語の現代語の包括的な記述に努める一方、歴史比較言語学上必要十分な語彙項目の捕捉に怠りなきよう留意する。とりわけ、調査言語が小言語・極小言語・危機言語の場合、文献記録が極めて乏しいことが多いので、比較研究上必要十分な語彙資料の捕捉は急務であろう。
以下、アツィ語について具体例をあげて述べる。必要に応じて、それに並行するビルマ語の対応例をあげる。
１．アツィ語(＝自称 ツァイワー語 Zaiwa dang[ヅァイワー・ダン])
　系統：シナ＝チベット語族チベット＝ビルマ語派ロロ＝ビルマ語群ビルマ語系の一言語。

分布と話し手人口：ミャンマー（カチン州東南部・シャン州北辺）11,838 人（1917 年）、中国（雲南省徳宏イ泰族景頗族自治州）59,000 人（1994 年）（参考：カチン語＝チンポー語人口：ミャンマー142,785 人、中国 23,000 人）

ビルマではカチン語(＝自称 チンポー語 Jinghpaw ga[ヂンポッ・ガ])が話し手人口最大でアツィ語人口は少数であるが、雲南ではアツィ語が話し手人口最大でカチン語よりはるかに多い。カチン語は、双方で、地域共通語となっている。因みに、カチン語はロロ＝ビルマ語群に属する言語ではない。この地域では、カチン語のほかタイ系のシャン語とロロ＝ビルマ系の諸言語が話されている。なお、ビルマ語系に属する言語には、ビルマ語・アツィ語のほか、マル語・ラシ語・アチャン語・ポラ語・チェンタオ語・ポン語がある。

２．アツィ語の音韻目録（→§０．①）

まず、基礎語彙を対象とした語彙調査から、音韻目録を作成する。

頭子音　　Ｃ－：　p ph m; t th n; k kh ng; c ch ny; ts tsh; s sh x; w y l r; ‘

頭子音結合　ＣＣ－：　py phy my; ky khy (kr)

尾子音　　－Ｃ：　p t k ‘; m n ng

(ng 軟口蓋鼻音 y 硬口蓋鼻音、sh 硬口蓋摩擦音、’ 声門音)

母音　　－Ｖ(－)：i e a o u;　ai au ui oi　(普通 plain 母音)

Ｉ E A O U; Ai Au Ui Oi　(緊喉 creaky 母音)

緊喉母音は ph, th, kh, ch, s, x, sh, r とは共起しない。

声調　/T：　開音節　　a　低平[22]、 a2　高平[44]、 a3　高降[41]

（弱化母音）　@　低平[22]、 @2　高平[44]

閉音節　鼻音韻尾　aN 低平[22]、 aN2 高平[44]、 aN3 高降[41]

促音韻尾　aS 低平[22]、 aS2 高平[44]

（N=m, n, ng　S=p, t, k, ‘）

３．語の意味記述と語彙体系の把握（→§０．②）

語彙調査において、音韻分析を進め音韻目録を作成と並行して、個々の語の意味記述を行なう。言語ごとに語の表わす意味領域は違っている。語は意味分節のラベルとなっていると考えることができる。例：（アツィ語のほうが意味分節が細かい例）「毛」アツィ語(Z)tsham3、ビルマ語(B)cham(-pang)髪；(Z)’@-mwui 濃い体毛（ひげ、腋毛、陰毛）、‘@-mau 薄い体毛(産毛など)、(B)’@-mwei<古ビルマ語(OB)体毛一般。《存在/所有》動詞「ある」(Z)co’-ra2 ある（無生物）、 nyI3-いる（有生物）、 po3-ある（入っている、含まれている）、wo2-ある（手に入れる、得た結果としてある、もっている）；(B)hri-sany ある（同源形式として、二番目以下は nei-, paa-, ra3-に比定できる）。（ビルマ語のほうが意味分節が細かい例）「洗う」(Z)chi-ra2(対象が何であれ); (B)chei2-sany 鍋・犂・手など、sac-顔、hlyo-衣類（洗濯）、rei　khyui2- 身体（水浴）。

形式や意味において相関関係のある語彙については、個々の語の意味記述のみならず、語相互の関係（＝語彙体系）の把握に努める。例：親族語彙（「きょうだい」など）：

(Z)'@2-mang3 兄、'@-na2 姉、'@2-ku 弟・妹、(B) 'ac-kui 兄、 'ac-ma3 姉、 nyii（兄から見た）弟、 mong（姉からみた）弟、 hnama3（兄からみた）妹、nyii-ma3 （姉からみた）妹。Ｚは弟妹を兄・姉に対する長幼の基準でのみ区別し性別には言及しない。Ｂは弟・妹を性別のみならず兄・姉 との関係でも区別し使い分ける（現在、下ビルマでは、妹は兄・姉からの別なく nyii-ma3 と呼ばれるようになった)。 色彩語彙 : (Z)'@-nyui3 は '@-phyu3「白」、'@-no' 「黒」、 '@-nE3「赤」以外のすべての色を指し、(B)の'a-nyui「茶色・褐色」より遥かに広範囲の色を含む。白・黒・赤以外の色について、その細かい色調の違いは 必要に応じて–nyui3 のまえに限定語（多くは物のなまえ）をつけて表わす。例 : man-xa'2-nyui3「草色」（緑、黄緑色）man 草木類、 '@-xa'2 葉 ; 'u2-kAng2-nyui3「卵黄色」（黄色）'u-kAng2 卵の黄身、'u2 卵 ; mI2-nyui3「土色」（灰色） mI2 土、土地。《往来》語彙 : 「行く」と「来る」が、地形的な高低差（上かみ・下しも）に応じた移動に対して、それぞれＡ形式とＢ形式に分かれる。「行く」(A)'e3-ra2　川下に行く、(B)lo2-ra2　川上に行く; 「来る」(A) le2-ra2　川上から来る、(B) lo3-ra2　川下から来る ; cf.（ビルマ文語）swaa2-sany 行く、laa2-sany 赴く、la-sany　来る、（アラカン方言）la2-rE 行く、 la-rE 来る。そのほか、数詞・《方向》語彙（方位など）などにも一定の体系性が認められる。

４．語彙と文法（→§０．③）

膠着的な形態的特徴をもつビルマ語やアツィ語の語彙調査において、名詞を訊いているあいだは、とりたてて注意すべき文法事項に出くわすことはない。動詞になると、アツィ語では、引用形式(citation form)を示す助詞-ra2 がすべての動詞に前倚的に付加され、これが動詞であることの指標となっている。これは、ビルマ語の-sany(口語では-te)と同様、叙法の叙述法（確定的叙述、realis）助詞としての機能ももっている。例 : tso-ra2 ⑴単語としての動詞「食べる」、⑵叙述法の文「(毎日）食べる。」「(今日）食べた。」

アツィ語で、普通の名詞・動詞以外で、単独でも出てくるものに人称詞と指示詞がある。直示体系（deixis）の語彙であるので、もちろん、個々に訊くだけでなく、文脈(context/co-text)のなかでその文法的意味を的確に把握し、この語彙が担う相関的な文法機能を詳らかにしなければならない。人称詞は、単数・双数・複数を区別し、単数に語形交替がみられるほか、一人称複数に除外形と包括形の区別がある（ビルマのアツィ語サドン方言は双数には除外形・包括形の区別がない)。例 : 一人称　単数 主格 ngo3「私ハ」、 絶対格 ngo「私」「私ヲ・ニ」、 属格 nga2「私ノ」; 双数　nga2nik（nik は対を表わす）; 複数　除外形 nga2mo(聞き手を含まない)、包括形　nga2nung2(聞き手を含む)。指示詞は、遠称（「あれ」「あの～」）に、話し手・聞き手と指示対象との高低の位置関係に応じて、平遠称 xe3 ／上遠称 xu3 ／下遠称m03 のみっつの形式を使い分ける。それぞれ話し手・聞き手から見て、遥か水平の／遥かに高い／遥かに低い位置にある指示対象を指す。

アツィ語の格表示は、人称詞について部分的に語形交替による例がみられるが、多くは名詞に後接される助詞による。主格と対格/与格については、ゼロ助詞によって表示されることも多い。つまり語順に依存することになる。また、《所属》(属格)・《連結》(連格)・《共

同》(共格)・《手段》(具格) を示す助詞が -‘e’2 という形式を共有している。

アツィ語の動詞は４つの叙法助詞をとることができる。(1)-ra2 叙実法－確定的叙述(realis)(2)-ra3 叙想法－不確定的叙述(irrealis) (3)-pe3 活写法－躍動的叙述 (完了) (4)-‘a’命令法－聞き手の行動を慫慂する叙述。(例) lo2-ra2「来た」「(いつも) 来る」、lo2r-ra3「来るだろう」「来よう」、lo2-pe3「(向こうから来るのを見て) 来た！」、lo2-‘a’「来い」(引用形式 lo2-ra2 、動詞の語形を示す時の「来る」)。この叙法表示の枠組みは基本的にビルマ語と同じである。

アツィ語の動詞には、多くのロロ＝ビルマ諸語にみられる、能動形と使動(使役)形の対立を形態的に区別するものがいくつかある。(例) kyo2- 「落ちる」 khyo2-「落とす」；ku-「渡る」kU-「渡す」。

そのほか、アツィ語の助動詞の用法、否定表現、疑問表現などにおいて、それぞれビルマ語との類似点・相異点が認められる。

５．アツィ語とビルマ語の語彙比較（§０．→④)

語彙比較において、比定できる同源形式が当該言語の常用語彙や基礎語彙には見つからなくても、特化した意味の語や古語・廃語のなかに見出されることがある。比較研究のための語彙資料の収集には、次のビルマ語の例にあるような場合も十分考慮しなければならない。「口」や「歯」という語は、一見したところ、アツィ語とビルマ語は同源形式をもたない語であるようにみえる。しかし、ビルマ語の語彙をよく点検してみれば、「口」や「歯」を表わす別の語あるいは関連語に対応する同源形式があることが分かる。「口」(Z)nUt2：(B)hnut(音声器官としての口)、普通の語 paa2-cap は複合語 (頬＋際) に由来する。「歯」(Z)tsui3 ：(B)(‘a-)cway (牙、犬歯)、普通の語 swaa2 は別の語根 (蔵緬祖形 *s-wa) に由来する。

アツィ語とビルマ語のあいだに認められる音韻対応の例をいくつか示そう。[声調](Z)低/(1)/:(B)高/2/「鼻」no：naa2、(Z)高/2/:(B)緊/3/「踊る」ko2-: ka3-、(Z)高降/3/:(B)低/(1)/ 《二人称代名詞》nang3 ： nang。[韻母](Z)/-o/:(B)/-a/「苦い」kho- ： khaa2、(Z)/-ai/ ： (B)/-ei/「風」lai3 ： lei、(Z)/-au/:(B)/-ui/ 「泣く」ngau3- ： ngui-、(Z)/-ui/:(B)/-ui/「角 (つの)」khyui3：khyui、(Z)/-u’/(B)/-ok/「飲む」shUk2-：sok-、(Z)/-ung/：(B)/-ong/「勝つ」’ung-：‘ong、(Z)/-ik/:(B)/-ac/「撃つ」pik-：pac-、(Z)/-ing/:(B)/-any/「糸」khing3 ： khyany、(Z)緊喉母音/-V/:(B)頭子音の有気性/Ch-～hC-/「蛙」p0：paa2、「鼻」n03：hnaa。[声母](Z)/ts-/:(B)/c-,s-/「食う」tso-：caa2-、「子」tso ： saa2、(Z)/x-/:(B)/hr-/「長い」xing3- ： hrany-。このほか、やや複雑な対応を示すものがあるほか、両言語が同じ音で対応するものも少なくない。

アツィ語とビルマ語は、多くのロロ=ビルマ語同様、「見る」「馬」「高い」と「腸」「頭」「卵」に並行して対応する同源形式をもつ。一方、アツィ語の「言葉」tang は、同源形式が、マル=ラシ=アツィ諸語 (ビルマ語系) にみられる以外、ビルマ語にはなくロロ語系諸言語にひろく見られる語である。また、アツィ語の「人」pyu3 は、マル=ラシ=アツィ諸語

には対応する形式があるものの、ビルマ語にも他のロロ=ビルマ系諸言語にも広くチベット=ビルマ系諸言語にも同源形式を見出すことができない。なお、ビルマ語の「人」suu と saa2 がロロ=ビルマ諸語の同源形式である。ビルマ語の「人」luu はほかの同系言語に同源形式をもたない孤立した語であろう。

（以下、参照文献一覧がつづく。）

参照文献

◇アツィ語

程黙(1956)「載瓦語簡介」『中国語文』53.（1956 年 11 月号）、北京。

徐悉艱(1981)「景頗族載瓦語概要」『民族語文』1981 年第 3 期、北京。

徐悉艱・徐桂珍(編著)(1984)『景頗族語言簡志(載瓦語)』（中国少数民族語言簡志叢書）民族出版社。

藪　司郎(1982)『アツィ語基礎語彙集』（アジア・アフリカ基礎語彙集 13）東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、134 頁。

藪　司郎(1988)「アツィ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一(編著)『言語学大辞典』第 1 巻、東京：三省堂、192-197 頁。

Yabu, Shiro(1988). “A preliminary report on the study of the Maru, Lashi and Atsi language of Burma.” In Yoshiaki Ishizawa(ed.), *Historical and Cultural Studies in Burma.* Tokyo: Institute of Asian Cultures, Sophia University,　pp.65-132.

朶示擁湯・徐悉艱・穆途端(編)(1992)『漢載詞典』(中国少数民族語言系列詞典叢書)　成都：四川民族出版社。

◇アツィ語収録の対照語彙一覧 I

Scott, George J. & Hardiman, J.P. (1900). *Gazetteer of Upper Burma and the Shan States.* Part I, vol. i, Rangoon.

Davies, H.R.(1909). *Yu ¨n-nan: the link between India and the Yangtze.* Cambridge.

Grierson, George A.(ed.)(1928). *Linguistic Survey of India,* Vol.I, pt.ii：Comparative vocabulary. Culcatta.

Hertz, H.F.(1935). *Practical Handbook of the Kachin or Chingpaw Language.*(revised & enlarged ed.) Rangoon.

◇アツィ語収録の対照語彙一覧 II

Burling, Robbins(1967). *Proto-Lolo-Burmese.* Bloomington: Indiana U.P.

Luce, G.H.(1985). *Phases of Pre-Paga ´n Burma: languages and history.*　vol.2. London: Oxford U.P.

蔵緬語語音和詞匯編写組(編)(1991)『蔵緬語語音和詞匯』北京：中国社会科学出版社。

黄布凡(主編)(1992)『蔵緬語族語言詞匯』北京：中央民族学院出版社。

◇アツィ語以外のビルマ語系諸言語

西田龍雄(1973)『多續譯語の研究―新言語トス語の構造と系統』京都：松香堂。
戴慶厦・崔志超(編著)(1985)『阿昌語簡志』(中国少数民族語言簡志叢書)　北京：民族出版社。
Yabu, Shiro(1987). "The Lashi language of Burma: a brief description." In Burma Research Group (ed.) *Burma and Japan.* Tokyo: Burma Research Group (Ryuji Okudaira in chief), Tokyo University of Foreign Studies.
藪　司郎(1990)「ビルマのアチャン語」崎山理・佐藤昭裕（編）『アジアの諸言語と一般言語学』三省堂、124-138 頁。
藪　司郎(1992)「マル語」亀井孝・河野六郎・千野栄一(編著)『言語学大辞典』第 4 巻、東京：三省堂、168-172 頁。
藪　司郎(1992)「ラシ語」『言語学大辞典』第 4 巻、658-663 頁。
Sawada, Hideo(1999). "Outline of phonology of Laovo (Maru) of Kachin State."(Appendix: Laovo-English vocabulary) In Shintani, Tadahiko (ed.), *Linguistic and Anthropological Study on the Shan Cultural Area.* 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。(科研研究成果報告書)
藪　司郎(2000)『マル語語彙集』(科研研究成果報告書)　大阪外国語大学。
戴慶厦(2005)『浪速語研究』(中国信発現語言研究叢書)　北京：民族出版社。
戴慶厦・李ㄟ吉(2007)『勒期語研究』(中国少数民族語言研究叢書)　北京：中央民族大学出版社。
◇アツィ語とビルマ語
藪　司郎(1982)「ビルマ語系諸言語の「方向」に関する語彙について」『通信』44 号、46-49 頁。
藪　司郎(1998)「地域研究/異文化研究と言語の研究」　池田修(編)『世界地域学への招待』嵯峨野書院、131-144 頁。

以上

*　　*　　*

藪　司郎
573-0153 大阪府枚方市藤阪東町二丁目１２－７
e-mail:　s-yabu@mua.biglobe.ne.jp

Shiro YABU(Professor Emeritus, Osaka University)
12-7　Fujisaka-higashi-machi 2-chome
Hirakata City,　Osaka Pref. 573-0153,　Japan

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
共同研究プロジェクト「語彙と文法」（主査：梶茂樹）
平成 21 年度第 1 回研究会(2009.7.18.)

アツィ語とビルマ語 ― 語彙と文法を考える

藪　　司　郎

０．言語調査

《言語調査は語彙調査から始まる。》

言語調査の第一段階では、基礎語彙項目よりなる言語調査表(言語調査票)を用いて、1000 から 3000 項目ほどの語を収録し分析する。

（１）言語調査―　まず当該言語の音韻(音素)体系の把握と音韻(音素)目録の作成

（２）当該言語の基礎語彙の集積→語彙集・辞書の編纂

①語の意味の記述

②語彙体系の記述～親族語彙(親族名称)・色彩語彙(色名)・類義語(同義語、反義語)

（３）当該言語の文法記述→文典の編纂。

①いくつかの文法項目の抽出。

②複合と派生（動詞の能動/使動の区別・出動名詞など)。

③文法形態素（助詞・助動詞など）

（４）言語調査と言語の記述―　記述言語学と歴史比較言語学

①現代語の包括的な記述

調査言語が小言語・極小言語・危機言語なら、多くは無文字言語を記録することになる。その場合、当該言語の古い記録（文献）はきわめて少ない。

②言語史の視点からの記述

歴史比較言語学的に予測される言語事実のデータの捕捉に怠りのない調査をする。

１．アツィ語

1.1.アツィ語の言語的背景

名称－［カチン語による他称］Atsi ~Azi ~Zi　/tsi55/

Atsi ga　~Zi ga　/tsi55ka31/

[ビルマ語 ----------]　<'a-jii2>/'@zi2

［自称］Zaiwa 載瓦 /tsai-wa3/[tsai22wa41]

Zaiwa mying/dang（載瓦語/~話）/tsai-wa3 mying2|~ tang /

系統－シナ＝チベット語族チベット＝ビルマ語派ロロ＝ビルマ語群ビルマ語系言語

＊ビルマ語系諸言語＝ビルマ語 Burmese；ポン語 Hpun；マル語 Maru、ラシ語

Lashi、アツィ語 Atsi、波拉語 Polo；仙島語 Xiandao、阿昌語 Achang

分布域－ミャンマーのカチン州 KachinState、ンマイ・カ Nmai Hka 東岸のサドン郡 Sadon(カチン語・アツィ語では Sadung) Township を中心に、シャン州北辺から中国の雲南省徳宏イ泰族景頗族自治州にかけて、話されている。

話し手人口－

	ミャンマー＊	中国＃
アツィ語 Atsi	11,838	59,000 余
マル語 Maru	35,531	2,200 余
ラシ語 Lashi	23,368	6,000 余
アチャン語 Achang	2,781	20,441
カチン語 Kachin	142,785	23,000

＊*Linguistic Survey of Burma.* Gov't Printing, Burma, 1917, p.54.

＃『中国少数民族語言使用状況』中国蔵学出版社、1994 年、1066 頁。

（カチン語［カチン族自称 Jinghpaw ヂンポー/cing31pho'31/］はこの地域の共通語 lingua franca となっている。）

カチン文化圏 Kachin culture sphere－

父系制出自の氏族、氏族名（苗字）、世襲の土侯「ドゥーワー」duwa、グムサ gumsa 型社会（階層的・専制的）、グムラオ gumlao 型社会（民主的・平等的）、マナウ manau の祭宴、マダイ madai の神

1.2.アツィ語の日常会話の表現

（１）tsang tso-be3-lu'　ご飯を食べましたか。

（２）kha2(-khyo3)　'e3-ra3(-tha)　どこへ行きますか。

（３）wang2-lE3-lu'　お元気ですか

（４）cecu kO-be3　ありがとうございます。

（５）'e3, lo2-shi-pe3　では、行き(＝帰り)ます。

（６）nang3 tsai-wa3 ngUt2-lE3-lu'　あなたはアツィ族ですか。

（７）ngUt2-lE3　そうです。

２．アツィ語音韻目録

2.1.頭子音 /C-/ （声母）

p	ph	m	w	
t	th	n	l	s
ts	tsh		r	
c	ch	ny	y	sh
k	kh	ng		x
'				

2.2.頭子音結合 /CC-/（声母＋介母）

py	phy	my	
ky	khy		(kr)

2.3.母音 /-V(-)/（韻腹）

普通母音	i	e	a	o	u	ai	au	ui	oi
緊喉母音	I	E	A	O	U	Ai	Au	Ui	Oi

（母音に長短の区別はない。緊喉母音は頭子音 p t ts c k ‘; m n ny ng w l y sh とのみ共起する。）

2.4.尾子音（韻尾）

p t k ‘; m n ng

母音＋尾子音（韻母）

#	p	t	k	‘	m	n	ng
i	(ip)	it	ik	i’		in	ing
e				e’		(en)	(eng)
a	ap	ip	ak	a’	am	an	ang
o	op	ot	ok	o’	om	on	ong
u	up	ut	uk	u’	um	un	ung
ai							
au							
ui							
oi							

(尾子音と緊喉母音とのあいだに、特別な共起制限はない。)

2.5.声調

声調は３つ区別される(-#開音節、-N 鼻音韻尾および-S 促音韻尾の閉音節)。

		－#	－N		－S
LOW(低平)	[22]	－V	－VN	[22~21]	－VS
HIGH(高平)	[44]	－V2	－VN2	[44]	－VS2
FALLING(高降)	[41]	－V3	－VN3		

声調の変調

動詞や指示詞の声調が、後続の助詞との接続により、変調する場合がある。

（１）動詞/-(1)/ + /ra2/ → /3-ra2/　　tso- 食べる　tso3-ra2

/-3/ + /ra2/ → /(1)-ra2/　　lo3- 来る　lo(1)-ra2

-ra2 は確定的叙述(叙述法)を示す。

（２）指示詞/-3/ + /ma2/ → /2-ma2/　　shI3 この　shI2-ma2

-ma2 は於格助詞（～ニ）である。

2.6.アツィ語とビルマ語の音韻対応

2.6.1.声調（／T）

(1)アツィ語L /(1)/　ビルマ語H/2/

no	鼻	naa2
mau	天、雨	mui2
pan	花	pan2

(2)アツィ語 H/2/　ビルマ語Cr/3/

ko2-	踊る	ka3-
nau2	乳房	nui3
phong2-	開く	phwang3

(3)アツィ語 F/3/　ビルマ語L/(1)/

khyi3	足	khrei<OB. Khriy	
tsui3	歯	cway	（牙）
nang3	あなた	nang	（おまえ）

（注）

ビルマ語　L, H, Cr(=creaky tone)

促音節には L,H の区別なし。

2.6.2.韻母（－V#,　－VC）

(1) Z. -a　B. -a

nga2	私	ngaa (私の)

(2)Z.　-i　B. -i/-e<OB.-iy

mi	火	mii2
mI3	土、土地	mrei<OB.mliy

(3)Z.　-u　B. -u

‘U3	腸	‘uu

(4)Z.　-o　B.　-a

kho-	苦い	khaa2
sho3	舌	hlyaa
wo2-	得る	ra3-

(5) Z. -ai　B. -ei

lai	弓	lei2
lai3	風	lei
lAi3	舟	hlei

(6)Z. -au　B. -ui

‘@-phau	祖父	‘a-phui2
ngau3-	泣く	ngui-

(7)Z. -ui　B. -ui

khyui3	角(つの)	khyui
khyui	折る	khyui2-
sho-wui	骨	‘a-rui2

(8)Z. –ui　B. –wei/-wai

‘@-mui	毛	‘a-mwei2
sui-	研ぐ	swei2-
phui	細かい粉	phwai

(9)Z. –a’ /-o’　B. –ak

wa’	豚	wak
‘@-tho’2	上	‘a-thak

(10)Z. –ang　B. –ang

wang3-	入る	wang-
myang	馬	mrang2

(11)Z.-u’　B. –ok

shUk2-	飲む	sok-
myU’2	山の芋	myok

(12)Z. –ung　B. –ong

pung-	蒸す	pong2
‘ung3	勝つ	‘ong

(11)Z.-ik　B. –ac

sik2-kam3	木	sac-pang
pik-	射る、撃つ	pac

(12)Z. –ing　B. –any

sing	肝臓	‘a-sany2
khying3	糸	khyany

xing3-　長い　　hrany-

(13)Z. –at　　B. –at
pat　週　　pat

(14)Z. –an　　B.-an
pan　花　　pan2

(15)Z. –ap　　B.-ap
'ap2　針　　'ap

(16)Z. –am　　B.-am
tsham　髪　　cham

(17)Z.-it

(18)Z.-in

(19)Z.-ip

(20)Z.-im

(21)Z.-ut

(22)Z.-un

(23)Z.-up

(24)Z.-um

(25)Z.?-uk　　B.-uik

(26)Z.?-ung　　B.-uing
khung2-　窪んだ　　khruing3-

(27)Z.-V(緊喉母音)　　B.頭子音の有気性(Ch-<*s-C-<*k-C-)

nO3　鼻	hnaa	Z. kyAng3　蚊	B. khrang
nUt2　口	hnut	cI-　貸借する(お金)	khyei2-
lEng3　車	hlany2	pO　蛙	phaa2
ngO'2　鳥	hngak	cIt2-(*)　愛する	khyac-
lAi3　舟	hlei	tsUp2(?)　肺臓	'a-chut

(「愛する、かわいがる」Z.cIt2-　B.khyac-<OB.khyat、B.-ac<PTB*-ik、
「肺臓」雲南の載瓦語 tsUt2-,　マル語・ラシ語も –t,　B.a-chut)

2.7.3.声母（C-）

(1)Z.ts-　　B.c-/T-/hly-
Z.tsh-　　B.ch-

tso-　食べる	caa2
tso　子	Taa2
sho3　舌	hlyaa
tsho　塩	chaa2
tshu3　油	chii

(2)Z.c-　　B.c-/ky-
Z.ch-　　B.ch-/khy-

cUp2-　吸う	cup-
cu'　女陰	cok
cI-　貸借する(お金)	khyei2-
chi-　洗う	chei-<OB.chiy-
chui-　甘い	khyui-

(3)Z.w-		B.w-/r-	(4)Z.x-		B.hr-
wang2-	入る	wang-	xing3-	長い	hrany-
wui3-	買う	wai-	xi2	前	hrei3
wui3-	笑う	rai-			
wUi3	水	rei			

３．基礎語彙の語彙比較

身体名称・親族名称・色彩名称・天文地文・動植物・衣食住・数詞・基本動詞・基本形容詞・時空名詞などが、汎言語的基礎語彙の対象となるであろう。

(1)チベット＝ビルマ語の同源語という視点から、アツィ語の身体名称の語彙比較の例を見てみる。

a)「目」チベット語 mig、扎壩語 nya55、カチン語 myi?31、ビルマ語 myak-、アツィ語 myo'-、ロロ語(喜徳) nyo55-、チノ語 mya33-　PTB*myak

b)「頭」チベット語 mgo, (敬語)dbu、普米語(蘭坪) qho55、扎壩語 gu13, gu33po55lo33、カチン語 po33、ビルマ語 ?uu2khong2、アツィ語 'ulum、ラフ語 o35qo11、チノ語 vu55khE55、スゴー・カレン語 kho31　PTB*m-gaw~*(s-)gaw,　*(d-)bu

c)「口」チベット語 kha、ビルマ語 paa2-cap（頬 - 際)、hnut（音声器官としての口、hnut-sii2「嘴」)、　アツィ語 nUt2、　ロロ語(喜徳)　kha21phi55、チノ語 hmo"55-hmo"55　PTB*m-ka

d)「歯」チベット語 so、カチン語 wa、ビルマ語 swaa2、（'a-)cway（牙、犬歯)、アツィ語 tsui3、ロロ語(喜徳)dZi33ma33、チノ語 a33cu"55　PTB*s-wa

(2)ロロ＝ビルマ語群の系統関係の親疎の指標となる同源形式のセットの例（西田龍雄)

e)「見る」ビルマ語 mrang-、アツィ語 myAng-, (雲南・載瓦語)myang3、ロロ語(喜徳)-mo33、ハニ語(緑春)mo55、チノ語 mj@42　PLB*'-mrang1

「馬」ビルマ語 mrang2、アツィ語 myang、ロロ語（喜徳）mu21mo21、ハニ語(緑春)mo31ma33、チノ語　mjo55　PLB*mrang2

「高い」ビルマ語 mrang3、アツィ語 myAng3、ロロ語（喜徳）a33hmu33、ハニ語(緑春)(go31)、チノ語 la55hmjO42　PLB*mrang3

f)「腸」ビルマ語'uu、アツィ語'u3、ロロ語（喜徳）vu33、ハニ語(緑春)u55、チノ語 a33vu55　PLB*'u1

「頭」ビルマ語'uu2-khong2、　アツィ語'u-lum、　ロロ語（喜徳）o33、　ハニ語(緑春)u31-du31、チノ語 u55-khE55　PLB*u2-

「卵」ビルマ語'u3、アツィ語'u2、ロロ語（喜徳）(chi21)、ハニ語(緑春)xa33-U33、チノ語 vu55　PLB*u3

(3) (参考)「人」チベット語 mi、扎壩語 sy55、カチン語 m@31sha31, wa33、ビルマ語 luu, suu, saa2、アチャン語 tSo55、仙島語 tSu55、アツィ語 pyu3、ロロ語(喜徳) tsho33、ラフ語 chO33、チノ語 ts@33zO55、スゴー・カレン語 pgha33　　PTB*r-mi(y), *(p)wa; *tsa, *za 'child (offspring)',　?PLB su,　pyu

3.1. 語の意味分節の違い

言語によって語の表わす意味領域は違う。語は意味分節のラベルとなっていると考えることができる。

3.1.1.「洗う」

アツィ語	ビルマ語
'au chi-ra2　鍋を洗う	hang2-'ui2 chei2-sany
myo'(tong) chi-ra2　顔を洗う	myak-hnaa sac-sany
'u(lum) chi-ra2　頭を洗う	khong2 hlyo-sany
kung3 chi-ra2　体を洗う	rei khyui2-sany

3.1.2.「毛」

アツィ語	ビルマ語
tsham3, 'u-tsham3　髪、頭髪	cham(-pang)
myo'-tsham3　眉毛	myak-khum-mwei2
'@-mui, sho-mui　濃い体毛	'a-mwei2<OB. a-muy
nUt2-mui　口髭	hnut-mwei
'Am3thang3-mui　顎鬚	me2-mwei2
ko-cOk-mui　腋毛	khyuing2-mwei2
nyI-mui, cu'-mui　陰毛	lii2-mwei2, cok-pat-mwei3
'@-mau2, sho-mau2　薄い体毛	×（対応する語なし）
sho-mau2　動物の毛、毛皮	saa2-mwei2　毛皮

3.1.3.《存在・所有》動詞

アツィ語	ビルマ語
co'-ra2　(無生物が)ある	×　/ hri-sany
nyI3-ra2　(有声物が)いる	nei-sany 住んでいる / hri-sany
po3-ra2　含まれている、入っている	paa-sany
wo2-ra2　得る、(得た結果として)もっている	ra3-sany

cf. wo2 yu-ra2 手に入れる（yu3- 取る）

shI2-ma2 nga2 yUm3 co'-ra2　ここ・ニ　私ノ　家（ガ）ある。

xau2-ma2 pyu3 r@-yu' nyI3-ra2　そこ・ニ　人　一・人（ガ）いる。
ngUn3 po3-lE3-lu'　(いま財布に手持ちの)お金（ガ）ある・カ。
ngUn3 wo2-lE3-lu'　(家／銀行に)お金（ガ）ある・カ。
nga2 cAng2 wa' nI3-lE3　私ノ　ところ（ニ）豚（ガ）いる・断定
nga2 cAng wa' po-lE3　私ノ　ところ（ニ）豚（ガ）(家の一員として)いる・断定
ngo3 wa' wo2-lE3　私（ハ）豚(ヲ)　もっている(＝手にいれてある)・断定

3.1.4.《きょうだい》語彙

アツィ語	ビルマ語
'@2-mang3　兄	'ac-kui
mang3-mo2　長兄	'ac-kui-krii2
'@2-na2　姉	'ac-ma3
na2-mo2　長姉	'ac-kui-krii2
'@2-ku　弟	nyii(兄から見て)、mong(姉から見て)
'@2-ku　妹	nyii-ma3(姉から見て)、hnama3(兄から見て)

-mo2 名詞につく接尾辞(拡大辞・指大辞)、 cf. ビルマ語 -ma3 主な、大～(lam2-ma3 大通り、lak-ma3 親指、khan2-ma3 大広間、ホール、mrui3-ma3 町の中心部、 prany-ma3 本州) (アツィ語 –o2 ： ビルマ語 –a3)、 krii2- 大きい

3.1.5.色彩名称

Munsell 表色系　色相(hue, H)・明度（value, V）・彩度(chroma, C)
佐竹昭裕―　黒・赤・白・青
B.Berlin & P.Kay(1969), P.Kay & C.K.McDaniel―　白・赤・黄・黒・緑・青
Gleason, Jr, H.A.(1955/1961)―（虹、光スペクトル）

（日本語）	赤・橙・黄・緑・青・藍・紫	(7 色)
（英語）	red/orange/yellow/green/blue/purple	(6)
（Shona）	cipswuka/cicena/citema/(cipswuka)	(3)
（Bassa）	zi~za/hui	(2) xanthic(帯黄色)/cyanic(帯青色)

3.1.5.1.アツィ語とビルマ語の色名基礎語彙

アツィ語	ビルマ語	植物学の術語
'@-nE3　赤	'a-nii　赤	
'@-nyui3　緑・青・黄	'a-nyui　茶色・褐色	cf. 'a-praa　青、'a-waa　黄
'@xui3　黄	×　/　hrwe<OB. hruy　黄金	cf. hrwe-waa「黄金色」
'@-mE　茶・灰・青	'a-many2 ~ 'a-mai2　黒	
'@-phyu3　白	'a-phruu　白	
'@-no'　黒	'a-nak　黒	

3.1.5.2.アツィ語の色の濃淡の表現

「まっ(真)～」'deep~'	「～っぽい、淡～」'~ish'
(鮮やかな濃い色)	(薄く淡い色)
tsam2-tsam2 nE3-　真赤だ	nE3-nE3-tsa2　赤っぽい、淡紅色
shing2-shing2 nyui3-　青々した	nyui3-nyui3-tsa2　薄緑
pang2-pang2 phyu3-　真っ白だ	phyu3-phyu3-tsa2　白っぽい
chik2-chik2 no'-　真黒だ	no'-no'-tsa2　黒っぽい
tik-tik mE-　黒ずんだ	mE-mE-tsa2　淡褐色

3.1.5.3.アツィ語の白・黒・赤以外の色の総称 '@-nyui3

man-xa'2 nyui3 「草色」(man 草木類、 '@-xa'2 葉)　緑・黄緑色

maison nyui3　「空色・水色」(maison ?)

kho2lAm2 nyui3　「茄子色」(kho2lAm2 茄子)

'@-no' nyui3　「紺色・藍色」('@-no'黒)

'u2-kAng2 nyui3「卵黄色」('u2-kaAng2 卵の黄身・卵黄、'u2, '@-'u2 卵、wo'-'u2 鶏卵)

pung2kyi2 nyui3　「袈裟色」(pung2kyi2 僧衣・袈裟) 濃黄色・山吹色

xui3 nyui3　「黄金色」('@-xui2 黄金色・黄色)　黄みがかった色(肌色から薄茶色まで)

shi2xum(-po2) nyui3　「桃色」(shi2xum "Shan zee"桃、'@-po2 咲いている個別の花)

mI2 nyui3　「土色」(mI2 土・土地)

cf. ビルマ語の 'a-praa と 'a-nyui

khui-phruu khui-<u>praa</u>　白い鳩　<u>灰色の</u>鳩(白鳩　緑鳩あおばと)

kraa-phruu kraa-<u>nyui</u>　白い蓮の花　<u>青い</u>蓮の花(白蓮　青蓮)

(khui　飼い鳩(pigeon)、khyui　野鳩(dove)；　kraa paduMma<P. paduma　蓮華)

3.1.6.「行く」と「来る」

移動動詞の「行く」と「来る」にはそれぞれ２形式ずつあって、川の上下乃至は土地の高低に対応して使い分けられる。

		A形式	B形式
「行く」		'e3-ra2	lo2-ra2
	(原義)	川下に行く	川上に行く
		低地に行く	高地に行く
	(拡張義)	近くに行く	遠くに行く
		故郷を出て行く	故郷に帰って行く
「来る」		le2-ra2	lo3-ra2
	(原義)	川上から来る	川下から来る
		高地から来る	低地から来る

（拡張義）　遠くから来る　　近くから来る
故郷を出て来る　　故郷に帰って来る

原義は地形的な観点からの意味素性の別によって規定されている。それに物理的・心理的な観点からの意味素性の別が加わって、拡張義が生じたものと推測される。

この使い分けはロロ語系(Loloish)の言語に広く認められる。

cong-khyo3 ‘e3-ra3　学校へ行く。（IRL=irrealis）

myitkyi2na2-khyo3 ‘e3-ra2　ミッチーナーへ行った。

kha2-ma2 ‘e3-ra3(-tha)　どこへ行くか。(IRL)

yUm3 tum lo2-ra2　家へ帰って行った。

sa2tung3-khyo3lo2-ra2　（マンダレー/ミッチーナーから）サドンへ行った。

myitkyi2na2-mai le2-ra2　（サドンへ）ミッチーナーから来た。

sa2tung3-khyo3 lo3-ra2　サドンへ帰ってきた。

B 形式の lo2-「行く」と lo3-「来る」は、それぞれ、ビルマ語の laa2-「赴く」と　laa「来る」に対応すると考えられる。「来る」は Z. lo3-(Falling tone)：B. laa-(Low tone)と規則的な対応を示している。「行く/赴く」は Z. lo2-(High tone)：B. laa2-(High tone)と規則的な対応を示していない。アツィ語の Low tone を高める別の要因が働いたものと推測される。ビルマ語の laa2-「赴く」は、swaa2-「行く」(PTB*s-wa　’be in motion, go, come)にとって代わられて文語の慣用表現に残っているにすぎない（例：'a-hrei3-sui2 laa2-so`～「東に向はば～」、su3 gati-sui3 laa2-paa-cei「善所（＝善趣；善道）に赴かなむ」）が、アラカン方言 Arakanese dialect では、「行く」はいまも la-(High tone)しか用いられない。

3.1.7.数詞

アツィ語

ra3 一、　‘I2 二、　sum3 三、　mI3 四、　ngo3 五

khyu’2 六、　nyIt2 七、　shit2 八、　kau3 九、　ra-tshe3 一十

ビルマ語

tac 一、　hnac 二、　sum2 三、　lei<OB. liy 四、　ngaa2 五

khrok 六、　khu-nac 七、　hrac 八、　kui2 九、　tac-chay 一十

「二」B. hnac<s-nik<k-nik,　SgK. khi　PTB*g-nis

「七」B. khu-nac<k-nik,　K. sa-nit, SgK. nwi　PTB*s-nis

3.1.8.助数詞（類別詞）

類別詞は名詞の分類の指標（ラベル）である。しかし、印欧語などの名詞の性 gender やバンツー語の名詞部類 noun-class と違って、類別詞は①名詞全体を覆う分類体系をなさず

②主要語 head となる名詞に語形上の呼応 concordance を要求しない。

pyu3 ra-yu'人ひとり、 khui ra-tu 犬一匹、lEng3 ra-lum 車一台、 sik2-kam3 ra-kam3 木一本、ban-po2 ra-po2 花一輪(りん)、sik2-xa' ra-khyap2 木の葉一枚

3.1.8.方向を示す語彙

方位　東　pui3-tho'2-khyam,　~-shut2　日の出の方向　　WrB. 'a-khram2　半分

西　pui3-wang3-khyam,　~-shut2　日の入りの方向

南　mau-pyI3(-khyam),　~(-shut2)　？天の横の方向

北　mau-tsUng3(-khyam),　~(-shut2)　？天の縦の方向

'a-pyI3-khyo3　"横方向に"　　|→　　'a-pyI3　横、幅

'a-tsUng3-khyo3　"縦方向に"　__↑　　'a-tsUng3　縦、長さ（tsung3 立てる）

	カチン語		ビルマ語
東	sinpraw /31-55/　sin 暗い、闇、	praw 引き出す	'a-hrei3"前"
西	sinna'/31-55/	shana'夜	'a-nok"後ろ"
南	dingda/31-31/　ding 真っ直ぐ	da 幅	tong"?山"
北	dingdung/31-33/	dung 長さ	mrok<mlac-'ok"川下"
			cf. T. 'og, B.'ok 下、？奥

４．語彙と文法

(1)文法項目

直示(deixis)の体系―　人称詞・指示詞

格表示(case marking)―　格助詞・その他の格表示法

叙法(modus)と相(aspectus)―　動詞

態（能動・受動・使役）―　動詞

可能表現・願望表現・義務表現・

否定表現・疑問表現

否定表現・疑問表現

(2)統語法―　語順と助詞、主節と従属節、修飾語（句・節）と被修飾語（句・節）、関係節

(3)形態法―　複合と派生

4.1.人称詞

		単数	双数		複数
一人称	主格	ngo3	nga2nik	除外形	nga2-mo'
				包括形	nga2-nung2
	対格	ngo			

	属格	nga2		
二人称	主格	nang3	nung2nik	nung2-mo’
	対格	nang		
	属格	nang2		
三人称	主格	yang	yang2nik	yang2-mo’
	対格	yang		
	属格	yang3		

-nik2「対」、nik2-tAng3　きょうだいふたり、ペアになっているものを指す。

双数表現には nga2　‘I2-yu’(私たちふたり)、nung2　‘I-yu’(あなたがたふたり)、 yang2 ‘I2-yu’(彼らふたり）という言いかたもある。一人称複数包括形には yang2nu2 という形式も稀に用いられる。

包括形/除外形は対立的に用いられる。

nga2mo’ tsang ‘e2 tso-ra3　私たちはご飯を食べに行った。

nga2-nung2 tsang　‘e２ tso-shang２　私たちはご飯を食べに行こう。《勧誘》

属格形は名詞の前に来る。

nga2 no-cung3「私の牛」、

nga2 (‘@-)wa-‘e’2 no-cung3「私の父の牛」

対格形(?)は絶対格形(?)か後置格形(?)と呼ぶべきものかもしれない。

ngo-‘e’2 nang　私とあなた

yang-le2 tAi-‘a’　彼に話せ。

4.2.指示詞

		＋N	＋ 格助詞 –ma2(~ニ)
近称	shI3　この	shI3 pyu3　この人	shI2-ma3　ここに
中称	xau3　その	xau3 pyu3　その人	hau2-ma2　そこに
平遠称	xe3　あの	xe3 yUm3　あの家	xe2-ma2　あそこに
上遠称	xu3　あの	xu3 pum3　あの山	xu2-ma2　あそこに
下遠称	mO3　あの	mO3 wUi3lang3　あの川	mO2-ma2　あそこに

「これ」「それ」「あれ」は、 tse3 shI3 か shI3 tse3 “このもの”（tse3 もの）などのように、指示詞と「もの」の連続で表わすこともある。

指示詞の位置は名詞の後ろでも前でもよい。対比的に述べるときは、名詞＋指示詞の順になる。

yUm3 sI3 tI2-ra2,　yUm3 xe3 kO3-ra2　この家は小さい。あの家は大きい。

指示詞には遠称に３形式あって、発話の場と話題の対象との地形的な位置関係に応じて使い分けられる。平遠称は話題の対象が発話の場とほぼ同じ高さにあるとみなされる場合、上遠称は話題の対象が発話の場よりはるかに高い位置にあるとみなされる場合、下遠称は

話題の対象が発話の場よりはるかに低い位置にあるとみなされる場合に、それぞれ、使われる。

xe3 yUm3 yang3 yUm3 ngUt2-lE3　　あの家は彼の家だ。

xu3 pum3-khau3-ma2 wam3 nyI3-ra2　　あの山のなかに熊がいる。

mO3 wUi3lAng3-ma2 ngo-tso kyai myo-ra2　　あの川には魚がたいそう多い。

4.3.格表示

4.3.1.人称詞（→4.1.）

動作主(主格)と被動者(対格)は、普通名詞の場合、ゼロ助詞で表わされることが多い。

khui shI3 pyu3 ngat-ra3　この犬は人を咬む。

khui shI3-ka pyu3-le2 ngat-ra2　この犬が/は人を咬む。（-ka,-le2 特定化・強調）

lAng3mui3(-ka) pO(-le2) tso3-nyI-ra2

4.3.2.格助詞

（１）～が（主格）-ka

（２）～を/に（対格/与格）-le2

（３）～の（属格）-‘e’2　/nga2 ’@-wa-‘e’2no-cung3　私の父の牛

（４）～で/に（於格）-ma2/　nga2 wa3-ma2　私の村に

（５）～へ（向格）-khyo3/　cong(-khyo3) ‘e3-ra2　学校へ行った。(cf.　khyo3 道)

（６）～から（奪格）-mai, -khyo3/　cong-mai tum lo3-ra2　学校から帰って来た。

cong-khyo3 tum lo3-ra2

（７）～で（具格）-‘e’2/　khyi3-lEng3-‘e’2 le2-’e　自転車で来た。

その他の助詞

（８）～と～（A と B（と）・・）-‘e’2/　nang-‘e’2 ngo　あなたと私

（９）～と（いっしょに）-‘e’2/　yang-‘e’2 (rawa2) ‘e3-ra3　彼と(いっしょに)行く。(IRL)

([yangnge’2]と発音される)

（10）～も　-le, -lAng, -mA2/　ngo3-le ‘e3-ra3　私も行く。(IRL)　SpB.　-le2　～モ

ngo3-lAng ‘e3-ra3　私も行く。(IRL) WrB. –lany2 ～モ

ngo3-mA2 ‘e3-ra3　私も行く。(IRL)

shI3 wa3-ma2-le wo2-lE3　この村にもある(手に入る)。

（11）～まで　-sho’/　napkyO2-sho’ shI2-ma2 nyI3-ra3　明日までここに居る。(IRL)

（12）～より《比較》　-tho’2/　myikyi2na2-ka satung3-tho’2 kO3-ra2

ミッチーナーはサドンより大きい。WrB. ‘a-thak 上

《連結》《共同》《手段》を表わす助詞が –‘e’2 という共通の形式を共有している（《所属》も同じ語形？）

4.4.叙法

アツィ語		ビルマ語
-ra2	叙実法－確定的叙述(realis)	-sany>SpB. -te
-lE3	断定	(-sa-tany2)
-‘e	-ra2 との違いは不分明、	-i3>SpB.-ye3 (OB.-e’)
-ra3	叙想法－不確定的叙述(irrealis) （推量・意思）	-many>Sp.-me
-pe3	活写法－躍動的叙述（完了）	-prii>Sp.-pi (WrB.-prii2 終わる)
-‘a’	命令法－聞き手の行動を慫慂する叙述	-#/(-lo3)>Sp.-#

-ra2 は動詞の引用形式 citation form を示すときにも用いられる。lo2-ra2「来る」

4.5.いくつかの動詞表現（助動詞の使用）

(1) 継続	-nyI3	（＜nyI3-いる）	tso nyI-ra2 食べている。
願望	-nau	(＜nau-醒ます)	tso nau-ra2 食べたい。
使役	-nAng3	(＜nAng3-放す)	tso nAng-ra3 食べさせる。
受身	–xui	(＜xui-出くわす)	khui ngat xui3-ra3 犬に咬まれた。
(2)可能	wo2-	（＜wo2-得る）	wo2 tso3-ra2（機会を得て）食べられる。
能力	ke3-	（＜ke3-良い）	ke3 tso3-ra2（慣れて）食べられる。 tsai-va3 tang ke3 tAi2-ra2 （習って）アツィ語が話せる。
完結	pan3-	（＜pan3-尽きる）	pan3 tso-pe3 食べてしまった。

4.6.動詞の能動：使動の形態的区別

(1) kyo2-	落ちる	khyo2- 落とす	ビルマ語	kya3-:khya3-
pyu’-	なくなる	phyu’- なくす		pyok-:phyok-
(2) kyu’-	怖がる	kyU’- 怖がらす		krok-:khyok-
ku-	移る、渡る	kU- 移す、渡す		×
(3) yUp-	眠る	shUp 寝かしつける		‘ip-: sip-
wut-	着る	xut2- 着せる		×

4.7.否定表現

(1)否定辞(後倚辞) ‘@- を動詞に前接する。

tsang ‘a-tso ごはんを食べない。(IRL) /食べなかった。(RL)

‘a-tso-nau 食べたくない。

‘a-wo2 tso (機会がなく)食べられない。

ngUt2-lE3-lu’ ― ‘a-ngUt2(-lE3) そうか。― そうではない。

(2)命令法の否定表現（禁止）は kha’2-を動詞に前接する。

myin2-ma2 yO3so-khyo3 kha’2-‘e3(-lE3)　夜に森へ行くな。

4.8.疑問表現

(1)単純疑問表現―　文末に疑問助詞 －lu’ を後接する。

(2)疑問詞疑問表現―　文中に疑問詞を用い、文末に疑問助詞 –tha を後接するが、疑問助詞－tha の使用は義務的ではない。

‘e-ra2-lu’　行ったか。

‘a-‘e3-lu’　行かなかったか。(RL)／行かないか。(IRL)

tsang tso-pe3-lu’　ごはんを食べたか。

ngUn3 ‘a-wo2-lu’　お金がないか。

ngUt2-lE3-lu’　そうか（＝本当か)。

shI3 xai2cung3(-tha)　これは何か。

yang　’o2-yu’(-tha)　彼は誰か。

kha2 ‘e3-ra3(-tha)　どこへ行くか。(IRL)

５．ビルマのアツィ語と雲南の載瓦語

「中国のアツィ語の報告とビルマのアツィ語の報告を対照検討してみると、この言語には地域的な差異があまり認められず、きわめて高い言語的均質性を保持していることがわかる。」(『言語学大辞典』第１巻、三省堂、1988 年の藪　司郎「アツィ語」の項末尾)

しかし、当然のことながら、（K）ビルマのカチン州サドン方言と（Y）雲南の徳宏イ泰族景頗族自治州潞西方言とのあいだには、発音や単語の違いがある。

（１）　発音

K.	Y.	
w-	v-	
r-	z-	ra3　一
ny-	ngy-	nyA2　タバコ(の葉)
sh-	xy-	shI3　この、これ
x-	xy-	xe3　あの、あれ（平遠称）
-	f-	(漢語・タイ語からの借用語)

（２）　語形

K.	Y.	
myo’-tsham3　眉毛	myo’-mui	
no-khyap2　耳朶	no-phyo	(K)-khyap２薄い平らなもの
tsUp2　肺	tsUt2	
myo’　草	man	
wUi3　水	‘i-cAm	「 彼に言うな。
kha’2-　《禁止》	khe2-	(K)yang-le2 kha’-tAi2

参照文献

◇アツィ語

程黙(1956)「載瓦語簡介」『中国語文』53. (1956 年 11 月号)、北京。

徐悉艱(1981)「景頗族載瓦語概要」『民族語文』1981 年第 3 期、北京。

徐悉艱・徐桂珍(編著)(1984)『景頗族語言簡志(載瓦語)』(中国少数民族語言簡志叢書) 民族出版社。

藪　司郎(1982)『アツィ語基礎語彙集』(アジア・アフリカ基礎語彙集 13) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、134 頁。

藪　司郎(1988)「アツィ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一(編著)『言語学大辞典』第 1 巻、東京：三省堂、192-197 頁。

Yabu, Shiro(1988). "A preliminary report on the study of the Maru, Lashi and Atsi language of Burma." In Yoshiaki Ishizawa(ed.), *Historical and Cultural Studies in Burma.* Tokyo: Institute of Asian Cultures, Sophia University, pp.65-132.

朶示擁湯・徐悉艱・穆途端(編)(1992)『漢載詞典』(中国少数民族語言系列詞典叢書) 成都：四川民族出版社。

◇アツィ語収録の対照語彙一覧 I

Scott, George J. & Hardiman, J.P. (1900). *Gazetteer of Upper Burma and the Shan States.* Part I, vol. i, Rangoon.

Davies, H.R.(1909). *Yu ¨n-nan: the link between India and the Yangtze.* Cambridge.

Grierson, George A.(ed.)(1928). *Linguistic Survey of India,* Vol.I, pt.ii：Comparative vocabulary. Culcatta.

Hertz, H.F.(1935). *Practical Handbook of the Kachin or Chingpaw Language.*(revised & enlarged ed.) Rangoon.

◇アツィ語収録の対照語彙一覧 II

Burling, Robbins(1967). *Proto-Lolo-Burmese.* Bloomington: Indiana U.P.

Luce, G.H.(1985). *Phases of Pre-Paga ´n Burma: languages and history.* vol.2. London: Oxford U.P.

蔵緬語語音和詞匯編写組(編)(1991)『蔵緬語語音和詞匯』北京：中国社会科学出版社。

黄布凡(主編)(1992)『蔵緬語族語言詞匯』北京：中央民族学院出版社。

◇アツィ語以外のビルマ語系諸言語

西田龍雄(1973)『多續譯語の研究―新言語トス語の構造と系統』京都：松香堂。

戴慶厦・崔志超(編著)(1985)『阿昌語簡志』(中国少数民族語言簡志叢書) 北京：民族出版社。

Yabu, Shiro(1987). "The Lashi language of Burma: a brief description." In Burma Research Group (ed.) *Burma and Japan.* Tokyo: Burma Research Group (Ryuji Okudaira in chief), Tokyo University of Foreign Studies.

藪　司郎(1990)「ビルマのアチャン語」崎山理・佐藤昭裕（編）『アジアの諸言語と一般言語学』三省堂、124-138 頁。
藪　司郎(1992)「マル語」亀井孝・河野六郎・千野栄一(編著)『言語学大辞典』第 4 巻、東京：三省堂、168-172 頁。
藪　司郎(1992)「ラシ語」『言語学大辞典』第 4 巻、658-663 頁。
Sawada, Hideo(1999). “Outline of phonology of Laovo (Maru) of Kachin State.”(Appendix: Laovo-English vocabulary) In Shintani, Tadahiko (ed.), *Linguistic and Anthropological Study on the Shan Cultural Area.* 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。（科研研究成果報告書）
藪　司郎(2000)『マル語語彙集』(科研研究成果報告書)　大阪外国語大学。
戴慶厦(2005)『浪速語研究』(中国信発現語言研究叢書)　北京：民族出版社。
戴慶厦・李ㄟ吉(2007)『勒期語研究』(中国少数民族語言研究叢書)　北京：中央民族大学出版社。
◇アツィ語とビルマ語
藪　司郎(1982)「ビルマ語系諸言語の「方向」に関する語彙について」『通信』44 号、46-49 頁。
藪　司郎(1998)「地域研究/異文化研究と言語の研究」　池田修(編)『世界地域学への招待』嵯峨野書院、131-144 頁。

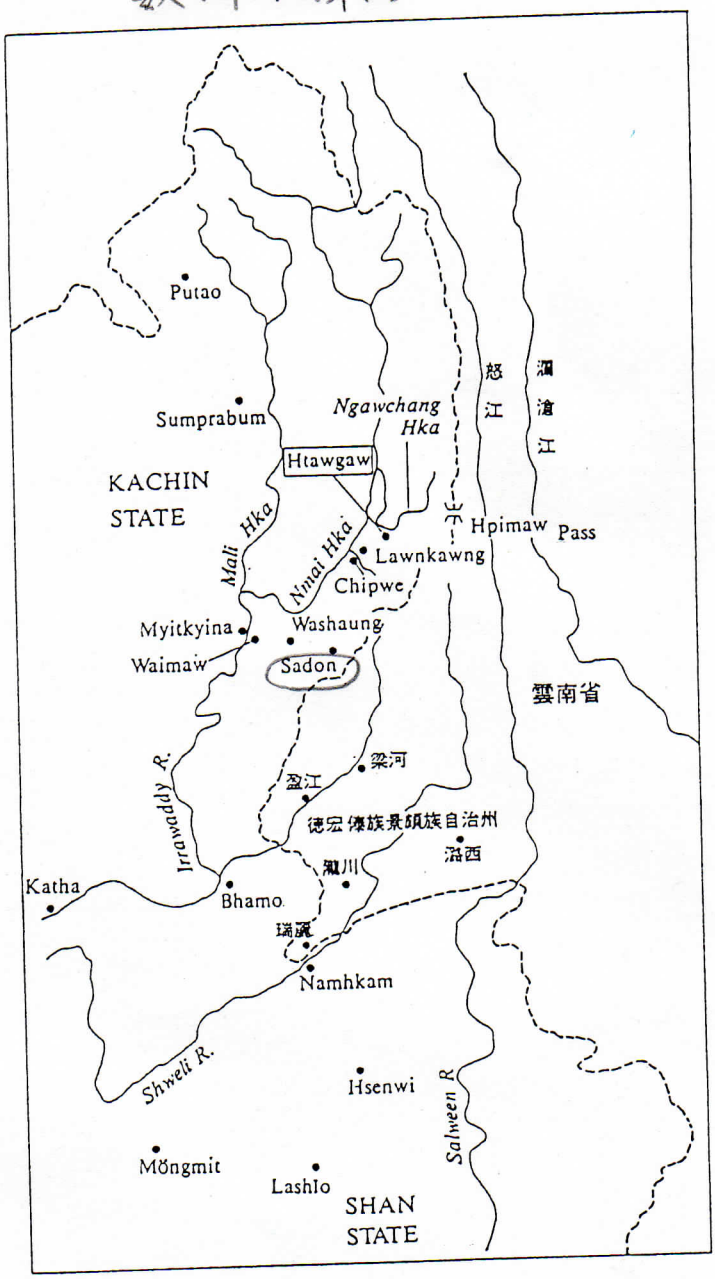
*　　*　　*

藪　司郎
573-0153 大阪府枚方市藤阪東町二丁目１２－７
e-mail:　s-yabu@mua.biglobe.ne.jp

Shiro YABU(Professor Emeritus, Osaka University)
12-7　Fujisaka-higashi-machi 2-chome
Hirakata City,　Osaka Pref. 573-0153,　Japan

藪司郎(1990), p.125

ナム・ゾウンニョー Ma Lanam Zung Nyaw /lānam tsóuŋ nyo/ の協力を得ることができた．彼女は父母ともトーゴー Htawgaw 出身のアチャン族で，家庭ではアチャン語を話しているという．トーゴーは，ミッチーナーの対岸ワイモー Waimaw から中国国境のピーモー Hpimaw (片馬)峠にいたる道路上にある主邑で，ンマイ・カ Nmai Hka の支流ゴチャン・カ Ngawchang Hka の湾曲部の南岸に位置する．ピーモー峠まで約 25 マイルの里程にある．トーゴーの住民はアチャン族が最も多く，その他にラシ族，マル族，漢族がいるという．彼女のアチャン語をトーゴー方言 (Htawgaw dialect) と称することにする．ただ，彼女は両親の転居にともないミッチーナーなど他の土地に住むことが長くなっているので，他の言語の干渉を受けている可能性は否定できない（ミッチーナーにもアチャン族の集落はあるが）．



調査は，服部四郎編『基礎語彙調査表(第三次)』(東京大学文学部言語学研究室，1953) の項目から 250 項目を選んで行なった．ただ，いくつかの事情により調査項目の選定が十分とはいえなかった．

なお，ビルマのカチン州のアチャン族は自称を ŋǒcháŋ といい，マル族，ラシ族，アツィ族からもそうよばれている．カチン州ではマインター Maingtha という呼称はよく知られていない．また，カチン州では，アチャン族自身もマル族，ラシ族，アツィ族も，アチャン族はラシ族に近くアチャン語はラシ語に近いと考えている[15]．

2. 従来のアチャン語資料

いままでアチャン語について報告された資料に次のものがある．

Anderson (1871). 巻末の Appendix B: Vocabulary (pp. 400–409) に Kakhyen (カチン), Shan, Hotha Shan, Leesaw (リス), Poloung (パラウン) の 5 言語について 200 語余の対照語彙表がある．Hotha

戴庆厦·李洁(2007), p.4.

的景颇族创制了一套拼音文字。现在两套文字均推广使用。

四、景颇族的支系划分

景颇族分为景颇、载瓦、浪峨[①]、勒期、波拉等五大支系。不同的支系在民族内部以支系名称自称，以示与其他支系相别；在民族外部则以“景颇族”名称自称，以示与他族的区别。各支系不仅有对自己支系的自称，还有对其他支系的他称。各支系的自称及他称情况具体如下表：

称法 / 支系	景　颇	载　瓦	浪　峨	勒　期	波　拉
景颇	景颇 [tʃiŋ^{31}pho^{ʔ31}]	阿纪、纪 [a^{31}tsi^{55}、tsi^{55}]	默汝 [mǎ^{31}ʒu^{31}]	勒施 [lǎ^{31}ʃi^{55}]	波洛 [po^{31}lo^{31}]
载瓦	石东 [ʃi^{55}t u̱ŋ^{55}]	载瓦 [tsai^{21}va^{51}]	勒浪 [lǎ^{21}l a̱ŋ^{51}]	勒期 [lǎ^{21}tʃhi^{55}]	布洛 [pǎ^{21}lo^{21}]
浪峨	泡沃 [phauk^{55}vɔ^{51}]	杂峨 [tsa^{35}vɔ^{31}]	浪峨 [lɔ^{31}vɔ^{31}]	勒期 [lǎ^{21}tʃhik^{35}]	布洛 [pǎ^{31}lɔ^{31}]
勒期	铺悟 [phuk^{55}]	载悟 [tsai^{31}vu^{51}]	浪悟 [l a̱ŋ^{31}vu^{51}]	勒期 [lǎ^{21}tʃhi^{51}]	布洛 [pǎ^{31}lɔ^{51}]
波拉	泡瓦 [phauk^{31}va^{31}]	氐瓦 [ti^{31}va^{31}]	龙瓦 [lõ^{31}va^{31}]	勒期 [lǎ^{31}tʃhi^{35}]	波拉 [po^{31}la^{31}]

当地汉族把景颇族的五大支系分别称作“大山”（景颇支系）、“小山”（载瓦支系）、“茶山”（勒期支系）、“浪速”（浪峨支系）和“波拉”（波拉支系）。

不同支系的地理分布以小聚居、大杂居为基本特点。即每个支系都有小块的聚居区，但总的是交错杂居的局面。在我国，景颇支系和载瓦支系人口较多，有几块较大的聚居区。如潞西县的西山区、

① 汉族称“浪峨”支系为“浪速”。